百里初午まつり

2020 ☆今年もにぎやかに☆

毎年2月11日に、百里基地反対同盟が主催して盛大に初午まつりが開かれています。

由来は基地反対闘争当時の「愛町同志会」が1958年に笠間稲荷から分祀した「百里稲荷大明神」を農業と平和の守り神として祭り、合わせて運動を背後から支える婦人たちを慰労するといったものでした。

現在は、県内外の支援の人々が集まり、ともに闘う意志を確認しあう場であるとともに現地の人達と御神酒を酌み交わし、赤飯を食べ、歌うといった、誰でも楽しく交流できる場となっています。

毎年200人を超える参加者で賑わいます。気軽にお出で下さい。

山西きよさん（1987年の初午まつりで）

平和公園がきれいになりました

誘導路を「くの字」に曲げている百里平和公園。手弁当の有志によって2016年から整備作業が行われてきました。2017年からは毎月2回ペースで、50回を超える作業が行われました。草刈りだけでなく、建物の修繕や片付け、樹木の剪定なども行い、見違える！　ようにきれいになりました。2019年からは平和公園の維持管理のために設立された「一般社団法人　百里の会」によって、維持管理と整備作業が進められてきました。

お色直ししてピカピカに輝いている朱色の鳥居と社殿を是非ご覧下さい。みなさんのお出でをお待ちしています。

百里の会

自衛隊は憲法違反

第７号　2020年1月15日

一般社団法人
百里の会
茨城県水戸市見川 5-127-281
Tel/Fax 029-251-2806
E-mail hyakurip@gmail.com
HP　https://hyakurip.web.fc2.com

手記は語る！ その3 百里の長老・高塚惣一郎さんの思い

1960年代　基地建設の開始と農民の生活、同盟の解散

農民と民主勢力が一緒に闘わなければ

1　防衛庁の切り崩し

（1）親戚を使って

格納庫とか兵舎がボツボツできてくると、周辺の人は「ああなってきては百里もダメなんだねえか。基地阻止の闘争よりは条件闘争にして町のために道路でもよく造らせるとか、学校の設備をよくさせた方が得策でねえか。いくらがんばっても結局おかみのやることには勝てねえんだ」というような考えの人が多くなってきた。そこで防衛庁はそういうのを（そういう雰囲気）利用して、まだ残っている者に対して、その人の知人とか、親戚の人を使って説得を始めたりした。例えば防衛庁の奴が親戚に行って「あの人はがんばっているけどあんまりがんばっていると損ですよ。売らなければ売らなくてもいいけど、別の方法（強制収容）があんだから。そうなると土地代金もわずかばかりになるから、今のうちに有利に売って出た方が得でねえか」と、そういうことを、残っている人の親戚に話してくる。そうすると親戚の人は心配になって自発的に訪ねていくわけだ。オラうちにも親戚の人が心配して訪ねてきた。「飛び地なんか持っているけど、ああいう所をバラ線で完全に閉鎖されたら、入れなくなるが、どうするんだ」と言ってね。「完全に閉鎖されて誰も入れねえんなら俺も行けねえんだから、そんときゃ俺も行かねえ」と言ったら「それじゃ話になんねえ」と言って親戚の人、帰って行った。

（2）卑劣な手段で

防衛庁はその他、いろんな卑劣な手段を使ってきたわけです。買収する時もな、まとめて買収するということはなかったんだよな。「本年度の予算は少ないんだ。2～3人買収するくらいの予算しかないから、隣の人に話してはだめだ。予算が足りなくなって買えなくなるからな」。そんなやり方で買収していったわけです。それから、残っている人の耕地をバラ線で囲い込んだり、基地の作業員なんかが来て嫌がらせをしたり、右翼系

援農に訪れた若者と語る高塚惣一郎　1973年

の団体みたいなのが入って来たりした。そういうことをやる反面、土地を売り渡した人を飛行機で招待して、九州とか北海道なんかを見物させたり、「この次に売った人はどこそこへ連れて行く」とか宣伝したりな。奥さんたちにはまた別に温泉一泊旅行をやるとか、周辺の人に病人が出れば、わざわざ車を持っていって病院さ連れてって治療してやるとか、子どものいる家には子ども

開拓農家の秋は忙しい　1969 年撮影

の欲しがる食べ物だの玩具を持って行ったり、娘のある家には化粧品なんかを持って行くとか、酒の好きな人には酒を配るとか、そういう両面を使ってな、だんだん切り崩していったわけです。

(3) 強制収用のデマも流す

そして実際に強制収用をするということが報道されたんだよな。俺も新聞みて知ったけど、ウソだと思ったな。前から弁護士なんかに聞いてたからな。もしあっても国会議員の人がやってくれると思ってたな。だけど必ず強制収用が無いとは考えてないすな。今でも、何かの手段があればやるだろうからな。

2　七人の侍

(1) 焼失した橘中学校再建問題で圧力

同盟内に七人の侍と呼ばれた人たちがいたわけなんです。この連中は非常に真面目な人たちで営農成績も優秀な開拓者でな、家もその人たちのが一番先に本建築になった。どうにか一人前の農家になれたっていう人は、百里を出て行きたくないという気持ちが確かにあったと思うんだよな。しかしそういう連中が、崩れた――結局は崩れたんだけどね。

その頃ちょうど橘の中学校が丸焼けになった。妙な原因でね。それで中学生は小学校に割り込んで廊下で勉強したり、公民館で勉強したわけです。しかし非常に不便だったわけです。そこで防衛庁が、「中学校を建ててあげましょう。だが条件がある。あの連中（百里の人間）が立ち退いて飛行場が完成する見通しが立てば建てましょう」ということを言ったわけです。当時同盟の委員長信戸は、主滑走路にただ一人頑張っており、委員長がいなくなりゃ滑走路はまっすぐになるわけです。そんな状況の中で例えば我々の子どもにまで嫌がらせをしたり、特に委員長の子どもには「オマエのオヤジががんばってるから学校できないんだ」とかってなことを言ったりな。区長会では委員長に対して土地を売り渡すように要請するために部落の人の署名を取ったりして、信戸くんを説得しようとした。信戸くんと七人の侍の仲も必ずしもよくなかった。防衛庁のやり方もあったと思うけどな。そして信戸くんの家庭内も複雑な面も少なくなかった。息子さんが家出をしたりしてな。

(2) 防衛庁の介入

そして防衛庁は七人の侍に意向を聞いたらしいんだな。その時、高塚清が20項目の質問書というのを出したんだよな。会合でこれが問題になったわけだ。当人は売る気はないんだと、からかってきただけだ、ジェット機1機分に相当する補償金を払えとか言って、からかってきただけだと言ってたけどな。しかしこちらから（高塚清から）20項目文章に書いて突きつけたということは考えられないな。そういった文句なんか書ける能力のある人じゃなかった。そんなことがあってからまた五の日の会合が始まったわけです。

開拓農民の労働と生活はきびしい

七人の侍は何か気にいらないことがあると「土地売ってしまうから」とよく言ったな。雨の多い年があってな、畑が水浸しになった時に、排水溝を作って流せばいいが、そうすれば下の人が困る。そういう時「土地売ってしまうから」というようなことを言ったな。

3　苦悩する農家

(1) 闘争で農業はほったらかし

砂川のような実力闘争をやったんではうまくいかなかった。理由はいろいろあると思うが、百里の場合は不便で動員力がなかった。そして激しい闘争をすると逮捕者や負傷者が出るから、そんな危険な闘争さ参加しないで離れていく人が闘争のあるたびに出てきた。さらにこういうことやりながら百里に住んでるのなら、こんな危ない所にいるなら、本意ではないが防衛庁さ土地売って出て行った方がいいという、闘いが不利になるような傾向があった。

我々は実力闘争の頃は農業の方をほったらかして闘争に打ち込んでた。我々としては、闘争は短期間に終わるものだと思ってたからな。だが短い間に終わるべき闘争ではなかった。「あいつらは闘争やってるから畑が草ぼうぼうになってしまうんだ」と言われる始末でな。事実そうだったんだよ。それで生活も相当圧迫されたんだよ。オルグの指導のもとに動いていたんだがな。

基地内でのデモ行進　1959 年頃

今日はどこそこへ言ってこいだとか、何々をやれとか言ってました。それで我々が行くわけだが、「隣は行かないのに俺の家、外ばかり歩いているから畑が草ぼうぼうになっちゃった。今度は隣の人に行ってもらったらええ」というように、家庭の中でもそういった摩擦が起こったわけです。オラうちでも七人の侍の脱落した後は、あまり遠いところなんか行くと文句が出るようになったってわけさ。その頃はばあちゃんらの活動もなくなった頃だったからな。

（2） 土地を売らないでがんばり通すために

闘いの方針についてもな、英雄的存在の人を作り上げるというやり方があったと思う。百里の有名人をつくる反面、目立たない人をかえりみない、そして結局そういう目立たない落後していった。そこを防衛庁はつけ狙って、そういう人から切り崩していったというわけです。

こりゃ長い期間かかる、自分が好まなくても長い闘いになると思うようになった。だがオルグの人なんか通してだね、土地を売らなければ基地はできないんだとな、こりゃ確かにその通りだった。百里の場合は全部民有地で国有地というのは一切なかったわっけだ。だから買収されない限り基地はできないってことだ。だから我々は土地を売らないでがんばり通していくのにはどうすればいいのか、それを自分で考え出さなくちゃいけない。それこそ地元農民でなければできないことだと思うわけです。我々が憲法問題説いてみたところで防衛庁は痛くもかゆくもない。それは法律の専門家にお願いしてやる以外勝利の方法がない。しゃべるのも、ビラを書くのも地元農民では容易じゃない、支援の人と一緒になって闘争進める以外に方法はない。百里農民だけでは到底やれるもんでねえ。百里に来てくれる人がいるから、百里を見ていてくれる人がいるから防衛庁も恐れるので、基地の建設も思うようにいかねえ。決して百里農民が恐ろしくて基地建設が遅れているわけじゃない。全国的にそういった人が多いから、力が強いからだ。しかし地元農民でなければできないこともあると思う。だから我々と民主勢力が一体となって闘わなければ百里の勝利は見られないと思う。

4　同盟解散――1964年

飛行機が飛ぶようになってからは、百里の闘争はもう終わったんだというような記事が度々報道されるようになった。そして1964（昭和39）年には同盟の解散があったわけです。同盟を解散する以前に七人の侍はすでに土地を売り渡していたんだよな。そこで会合のとき委員長が「同盟の組織に入っとって、土地の売り渡し工作をするのなんかもってのほかだ」と言ったわけです。そこまではいいわけです。ところが「それをやるなら同盟を解散して各自の考えでやれ」という。あとがおかしいわけです。それさ賛成したのが大分あったわけです。我々は納得しないで、解散じゃなくて、そんな人は脱退しろと言った。そんな馬鹿げた話はないとな。しかし賛成の人の方が多いんで我々途中で席を立ってきた。その後、支援団体の母体である県労連が来てな、「百里でも相当長い期間やるだけのことをやったんだと、ここまでやればいいんじゃねえか、だから解散してもいんじゃねえか。もっと適当な場所を見つけて出て行った方がいいんじゃねえか、そういった世話をしてあげましょう」というようなことを言ってきた。その時、来た人が例の迷台詞を言ってったわけだ。「土地を売っても魂を売らなければいいんだ」という迷台詞をな。我々はそういう「寝言」みたいなこと聞いてられねえと、勝手に出て行けばええと考えたわけです。そして委員長も早速売り渡してしまった。その時には売り渡していない人が相当あったけどな。その人らはみんな優秀な農家で家畜もいたし、農機具も整備されてるし、営農状態も良かった。だけどみんな売って行ってしまった。防衛庁が買い上げたんだか、こちらが売りつけたんだかわかんねえようなわけでな。

俺の開墾した土地に戦後4人ほど入植したわけだよな。その時にはこの人らは戦場で苦労してきたひとだから、分けてやっても惜しくもなかった。自分の家族に分けてやったような気持ちだった。だが同盟解散して売って出る時には、こりゃ馬鹿らしいと思ったな。こんな奴らにやるんでなかったという感じも少しは起きたけどな。

＊3回連載した「高塚さんの手記」は今回で終了です。